

平成22年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会 報告

1. 日程：2010年8月5日(木)
2. 場所：新潟大学 国際センター
3. 出席者：西村謙一、埋橋淑子、鐘ヶ江主任
4. 協議内容：3つの講演と日韓生の体験報告およびパネルディスカッションが行われた。以下、簡単に当日の配付資料等に基づき協議の論点を報告する。

講演Ⅰ 大韓民国国立国際教育院「第二次事業（10年）に寄せる期待」

- ・2010年、第6期までの591名が課程を修了、うち72%が大学院進学。大多数は日本の大学院に進学。
- ・2008年に第二次事業として10年の延長が合意され、第一次の成果の一層の発展を期待。
- ・第二次事業では大学院課程の支援策強化の必要。学部卒業生より一定人数選抜し、修士課程まで支援。
- ・「兵役休学制度」導入を多くの学生が希望。これらの解決を含め、両国によるより一層の努力が必要。

講演Ⅱ 慶熙大学校国際教育院「第二次日韓共同理工系学部留学生事業 予備教育システムの為の発展の方向性」

① 第2次第1期生の学習状況

- ・各教科指導とともに動機付け（先輩との懇談、ホームカミングデーなど）と生活指導を強化。
- ・文化の理解が言葉の学習も助けるという観点で文化学習も重視。10期より日本語力は向上。
- ・学則を定め学生による自主的な運営に取り組ませている。

② 日本の予備教育および学部留学

- ・今期、日本からの「教育参画」（昨年度は日本側の科研費により実施：大阪大学からも2名が授業提供）がなく残念。今後も日本の教授による講義、先輩からの体験談、日本での生活についての情報などを、連絡を密にして取り入れていきたい。各大学担当教員とのメール交換などもさせていきたい。

③ 学部卒業後に対する考え方

- ・大学院進学希望が大多数で、日本の大学院のさまざまな情報をあらかじめ提示し、将来設計に役立たせたい。そのための研究が必要。

講演Ⅲ 文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室 「日韓共同理工系学部留学生 第2次第2期生の選抜について」

- ・市道別推薦者750人→筆記試験合格者150人→最終合格者100人
- ・事業の基本は第一次と同じだが、一次での問題点を反映し二次を実施。具体的には、予備教育期間中の成績等の不良者の取り扱いと学生のモチベーション問題。→調査を通して対策を集約。
- ・成績評価基準の明示、修了判定基準の設定、初期段階での成績通報制度が必要。
- ・兵役休学制度→私費留学生の実態も調査して継続して検討。

パネルディスカッション 文科省、韓国国立国際教育院、横浜国立大学、神戸大学、新潟大学

- ・大学の授業にとって必要な能力の基準をもとに、予備教育の共通基準がつかれないか。
- ・専門科目の充実、理・工の教員による授業、研究室訪問などでモチベーションが上がった。
- ・成績等の不良者への最終的処置を決めておく必要がある。
- ・5年の教育プログラムととらえ、1年で失格という考え方はしない。学生が変わる可能性は多い。
- ・ほとんどの学生は優秀という点を押さえておく必要。魅力ある予備教育づくりの余地はまだある。